

## 創立20周年記念号によせて

学長 長戸路 千秋

烏兔匆匆という言葉があるが、まことにその通りであって、私は、本学の創立者が多大の苦心を重ね、「敬天愛人」の教育をさらに進展させて大学教育に着手し、本学を創立して以来、早くも20年の年月を経過したことを思うとき、当時を回想してまことに感慨無量のものがある。今から思えば、まるで昨日のことのようであるが、当時の創立者の悲願は、教育をここまで拡充しなければ、一貫した「敬天愛人」の教育事業は完了しないという趣旨であったのである。

そもそも、「敬天愛人」という理念は、人生にとっても、したがってまた、次代を育成する営みである教育にとっても究極的なものであり、これを欠いては、真の意味の人生も、したがってまた、真の意味の教育も成り立たないという深い信念から発していた。

これを今様に表現していえば、われわれは、すべて天地宇宙の生みの子、天地宇宙はわれわれの親であって、われわれは、生みの親である天地宇宙に働いている理法（道理）を謙虚に追求し、その理法ないし道理に随順して生きるべく、自然を尊び、人間相互の憎悪を除き去る努力を、生涯に亘って続けていくより他に、人間の生きのびうる道はない。そして、その基本的姿勢を教育の過程において、次代に植えつけるための渾身の努力をはらいつづけるべき責任が、教育者に重く課せられているのであるといわねばならぬ。少くとも、われわれ教育者にとって、「後は野となれ山となれ」の姿勢は瞬時といえども絶対に許されるべくもないのである。敬天愛人は、このようなことの簡潔な表現にほかならないのである。更につぎつ

めて言えば、これこそ人間の「いのちの守り」たらんとするものともいえるべき確乎たる決意の表明であったといわねばならぬ。

「いのち」を大切にする基本的姿勢、すなわち、大乘仏教でいう、すべての人間に、ひいては、すべての生きものに、いや、ついには、すべてそれらを生かしめる一切の物質にいたるまで、こうした姿勢を徹底化していくのでなければ、人間は済われないという境地（「一切衆生 悉有仏性」の道元的解釈）にまで到り着かんことを志向する建学の精神であったとさえいえるのである。したがって、本学での<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>経済学教育も、「経世済民」という、経済学の根底に本来具わっているべき「いのちの守り」としての、人間の果すべき使命の一つの実践形態であったといえるのである。

いかに学問が、その発展進化のために、分業化され、細分化され、したがって、それらの研究の諸成果が、綿密を極め、精緻をつくしたものであっても、それらのそれぞれが勝手に一人歩きをし、その基底に存在すべきあらゆる人間のいのちの守りに、ひいては、人間をして人間たらしめる天地宇宙、森羅万象の「いのち」の守りにまで、繋がっていくのでなければ意味がないといわねばならない。

天地宇宙、大自然の真実、その中でのみ生み出され、その中でのみ養われ、その中でのみ生き得、活動し得る人間が、そうした基本的根源的な自覚に基づく「謙虚さ」を欠いて、徒らに局面的、一面的な、あたかも、「葦の髄から天井のぞく」たぐいの、まさに狭隘な<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>私見・管見にすぎないたぐいのものを以て、不遜にも絶対の真理と思い込み、他の立場に立って論ずる者の意見を軽視し、甚だしきは、徹底的に否定しきる傲慢さは、まさに許されない愚かしさといわねばならぬ。

なお、ここで注意しなければならぬことは、このような主張は、決してありきたりの、平板な、低次元の功利主義的ないし実用主義的な立場に立ってのものではなく、はるかに高次元の、あるいは、逆に言って、より基底的な見地から、人間のとるべき究極の立脚点に立っての主張であると

いわねばならぬことである。率直に言って、今日のように一見学問の異常ともいうべき発達の真っ只中にあって、しかも、その半面、これまた異常ともいうべき情報過多を招来し、その結果、人間のいのちの持つ力を弱め、はては、人間を衰亡ないし自滅させてしまうに到るような恐れさえかもし出している仕儀となっているに到っては、一見いかなる論争の賑かさも、学問の発達も所詮は本末転倒、愚の骨頂の沙汰といわねばならぬ。そして、この精神に立脚する人生観ないし教育観への復帰こそ、人間を本来あるべきその原点にまで立ち帰らしめ、人間（ひいては人類）が、今日の陰悪を極める諸情勢を乗り越えて、真に未来にまで生きのび得るための唯一絶対の条件をなすものといわねばならない。

宮沢賢二の言葉を借りていえば、まさに、

「筆ヲトルヤマヅ道場勸奉請ヲ行ヒ  
所縁仏意ニ契フヲ念ジ  
然ル後ニ全力之ニ従フベシ  
断ジテ教化ノ考タルベカラズ！  
タダ純真ニ法樂スベシ  
タノム所オノガ小才ニ非レ  
タダ諸仏菩薩ノ冥助ニ依レ」

という境地と、いわば、霊犀相通ずるところのものを実現しようとする建学の精神の提唱であったといえるのである。

幸いにして、まったく幸いにして、創立の当初から同志ともいうべき熱意を以て、全教職員の方々を始め後援会の方々による多大の支援と協力とを得て、この創立者の悲願の達成に着手して、たちまちのうちに20年に亘る草創期を大過なく経過して今日に到り、いよいよこれから、より大きな発展を目ざして、更に次の、より大きな歩を踏み出していこうとする今、私はまことに感慨にたえない。私は、これらの方々に心から敬意と感謝をささげるものである。

ここに，この20周年記念号を発刊するに当り，私の只今の感慨を申しのべさせていだいて筆をおく次第である。